



# 鈴木バイオリンフリーコ Bコース

ふるさとガイドおおぶ

～鈴木バイオリンフリーBコース～

# 鈴木バイオリンNO1



## 鈴木バイオリン大府分工場

商号	鈴木バイオリン製造株式会社
所在地	〒474-0026 愛知県大府市桃山町二丁目23-1
TEL	(0562) 57-5245(代)
FAX	(0562) 57-5246
創業	1887年
会社設立	1930年6月
代表者取締役社長	鈴木 隆
事業内容	バイオリンを中心とする弦楽器の製造
系列会社	恵那楽器株式会社

### 鈴木バイオリン大府分工場

昭和10年（1935）、大府町名高山に国産ヴァイオリン製造で名高い「鈴木バイオリン製造株式会社」の大府分工場5,384坪が建設されました。この地が、欧州のヴァイオリン製造の一大拠点であったドイツのマルクノイキルヘンに似ていることで、この地を「日本のマルクノイキルヘン」にしようという創業者である鈴木政吉氏の思いがあったので、(将来展望の拠点工場と考えた)、斉韻研究所、自宅を建設して研究に没頭した。政吉の最後の仕事場としてその生涯をとじるまで住んでいました。

1944年（昭和19）第二次世界大戦の戦局悪化に伴い、大府工場は三菱重工に買収され航空機部品工場の総括本部となった。同年、政吉は横根町名高山にて肺炎により84歳で逝去した。政吉は永眠する三日前まで斉韻研究所にこもりヴァイオリン研究に没頭していたという。

現存する鈴木政吉氏製作のヴァイオリンとして、故高松宮宣仁親王所有のヴァイオリンがあります。

また、三男の鈴木鎮一氏は、スズキ・メソードの創始者としてヴァイオリンを通じた幼児教育の第一人者であり、鈴木政吉氏製作のヴァイオリンが、鈴木鎮一氏を介して天才物理学者のアインシュタイン氏に贈られ、そのお礼の手紙も残っております。

現在世界で活躍している名ヴァイオリニストである竹澤恭子さんの出身地である大府は、名器の故郷でもありました。

## 鈴木バイオリンNO2



### 同社と大府市の縁

同社は日本におけるバイオリン製造のヴァイオリンとして知られ、1887年(明治20年)に名古屋で創業。

大府市とは、世界恐慌後の1935年(昭和10年)に大府分工場を新設したというつながりがあります。しかし戦争の激化に伴い、1944年(昭和19年)に大府分工場は残念ながら閉鎖となりました。

現在、おおぶ文化交流の杜「allobu(アローブ)」に鈴木政吉氏の銅像が建立されています。

新たに本社工房が入るのは大府市の元レストランだった建物です。工房の主な設備を整えて生産を始めており、4月に移転作業は完了しました。新本社では政吉の三男の鈴木鎮一が創設した早期音楽教育「スズキ・メソッド」の教室を開講しています。

大府市が市民に広く文化芸術を振興するため、同社の本社工房移転を後押ししようと模索する中、当社「もも山 森の家」に白羽の矢が当たりました。欧風のメルヘン&ファンタジー感あふれる空間は同社経営陣も気に入り、大府市長たつての申し出をお受けすることとなりました。

## 大清水地蔵様



地蔵様



地蔵堂

大府市の延命地蔵尊のあるところは大清水地蔵様と呼ばれた。

今も清冽な清水が湧出。往時は大量の清水が出たところから大清水と呼ばれた。この大清水は大府発祥の地であるといわれている。

領土争奪の戦国乱世の端緒となった応仁・文明の大乱(1467～1477年)に朝廷の高位、高官はひそかに都落ちし難をさけた。大府にも七津大夫(別の記録には滝本中納言とも)というものが、原の大清水に七津屋敷という御殿を設けて居住した。大夫は常に烏帽子、直垂で挙動温雅、風格があつて近郷近在を謡祈禱し、社寺を巡行した。土地の人々は大夫様と尊称していた。以後大夫の徳を慕つて大夫を村の名前にしたといわれる。

延命寺の元禄7年の古文書に「当時大志水の下七津屋敷に滝本中納言と申す公家衆居られ候申伝へ候」とあっていにしえから滝本中納言と七津大夫とを同一人としている。

ここに祀られている地蔵尊は、明和4年(1767年)に建立されたものである。

昔から、地域の人々の信仰を受けてきたものといえます。

またかつては清水が湧き出たであろう井戸跡が地蔵尊の前にあります。

## 桃山公園NO1



ソメイヨシノ



ハナショウブ

静かな住宅街に囲まれた小高い丘の上にある市民の広場であり、大正～昭和初期にかけて、大倉和親がガンジ山（現桃山公園～大倉公園を中心とした丘陵地）で桃園の経営を行ったのが始まりで、最盛期には3、6万本の見事な桃園の丘陵地が拡がり、桃の果実は松坂屋卸売会で大好評を得ていた。桃の花が咲き乱れた情景はまさに一大絵巻で、県内外から大勢の花見客が訪れ華やかな宴が繰り広げられ、桃花観光の名所となった。このためガンジ山の地名は「桃山」と呼び名が変わった。

昭和九年～十年頃に大倉和親は、桃園から高級住宅地への転換を計り、自らの手で区画整理し、「高級園芸住宅地」と銘打ち住宅地内の道路脇には桜を植えた。その桜が桃山を桜の名所にした。

現在、250本のソメイヨシノ・1200本のツツジや、200㎡ある菖蒲池の1000株のハナショウブも見事である。

## 桃山公園NO2



風車モニュメント



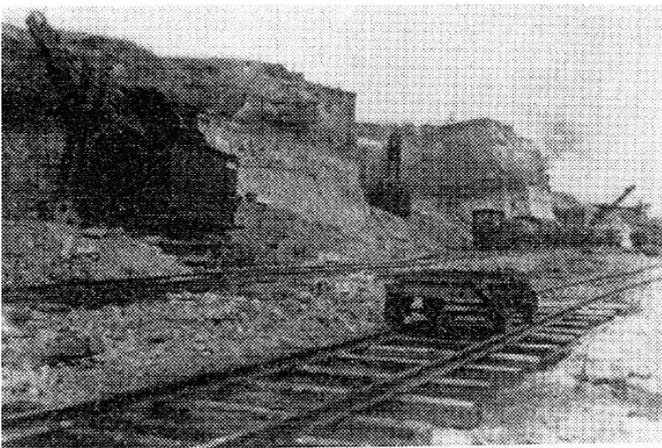
灌漑用水の水源井戸

大正～昭和初期にかけて、大倉和親は、3、6万本の桃の木を潤すため、自然風を利用した西洋揚水風車（鉄製）を設置し、灌漑用水を引いていた。この水源が井戸であり、昭和15年頃まで利用されていた。

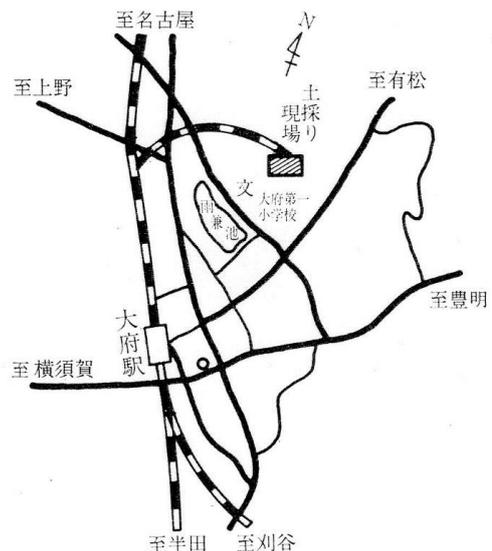
現在は高さ17m、直径4.5m、22枚の羽を持つ風車モニュメントが設置され、この展望台から大府の町並みはもちろん、衣浦港や御嶽山を一望することができる。

### 名古屋駅改築に協力した大府のあかしの崖跡

昭和12年2月、名古屋新駅が完成した。この工事には大府が多大な貢献をした。それは現大倉公園付近の土砂が、名古屋駅建設用の土として使用されたのである。当時の町長酒井鼎一をはじめ町会議員や大府駅長今野喜一郎は、この事業遂行のため、地主の大倉と鉄道局の中間に立ち、実現に努力した。土砂の搬出は、4年より11年までの7年間の長きにわたった。現大倉公園付近の土採り場へ大府駅から軌道を設置し、貨車で搬出した。当時の大府駅分工長長浜重康の話によると、ドラクラインというキャタピラ付重機二両で土砂を採掘し貨車に積み込大府駅まで運搬した。この引き込み線は、カーブがきつく、よく貨車が脱線したという。



土採り作業風景



土採り場付近の地図